

日本語のヲ格項の主題化文とインドネシア語の di + 動詞及び ϕ + 動詞の構文との対応関係

Tiwuk Ikhtiari

1. はじめに

日本語におけるヲ格項の主題化、つまり基本文である能動文の目的語（動作対象）が主題化されると、以下の文ようになる。

- (1) 山田さんがケーキを作った。(能動文)
- (2) ケーキは山田さんが作った。(ヲ格項の主題化文)¹

例文 (1) の「ケーキ」は動詞に対してヲ格関係を持っており、それを文頭に置いて助詞ハが付けられると、(2)のようなヲ格項の主題化した文になる。²

主題を標示する助詞ハは日本語の特徴である。日本語の主題化文と、(西洋の言語ほど度合いは高くないが) 主語卓越と言われるインドネシア語における主語との対応関係を調べた場合、お互いの共通点および相違点は興味深い問題であると思われる。

本稿の題名が示すように、インドネシア語には、di+動詞と ϕ +動詞の構文があり、それは目的語（動作対象）が話題の出発点になる際使用される構文であると考えられる。この構文は日本語のヲ格項の主題化文と対応すると考えられる。

本稿では、日本語のヲ格項の主題化文について整理し、それとの対比においてインドネシア語の接頭辞 di+動詞と ϕ (ゼロ接頭辞)+動詞の構文とその用法を説明したいと思う。最後に小説からヲ格項の主題化の幾つかの例文とそのインドネシア語版の文を取り上げ、ヲ格項の主題化文とインドネシア語の di+動詞と ϕ +動詞の構文との対応関係を示したい。

2. 日本語のヲ格項の主題化

白川 (2001) は目的語を主題化した文は、目的語に多くの注意が向けられる表現である点において、受動文と共通した特徴を持っているが、相違点もあるとして、次のような例をあげている。

①単純に目的語について述べたい場合は例 (4)のようなヲ格項主題化文を使用する。

(3) *自転車はさつき岡田さんに使われていた。(受動文)

(4) 自転車はさつき岡田さんが使った。(ヲ格項主題化文)

②主語が特に問題とされない場合は、例 (5) のような受動文を使用する。

(5) 2020年のオリンピックは東京で開かれる。(受動文)

(6) *2020年のオリンピックは東京で開く。(ヲ格項主題化文)

助詞ハは、《主題提示》と《対比》という二つの機能を持っている。これは、「ヲ」項格の主題化にも当てはまる。

(7) 《主題提示》

彼はいつもあの手袋をはめている。あの手袋は彼の死んだお母さんが編んだものだそうだ。(前の文脈で取り上げられている目的語について述べる)

(8) 《対比》

サラダは井上さんが作って、デザートは田中さんが作りました。

三上 (1960:26) は、「この本は、父が買ってくれました。」という文における「この本は」は「この本ヲ」を代行するとして、「X ハ」は、「X について言えば」という「X」を題目として提示しているとしている。尾上 (1995) は、前提部分(題目語)は後続部分の《説明対象》になると指摘している。

基本文である能動文には、対象(例:「強盗が窓ガラスを壊した」)、経路(例:「橋を渡る」)、起点(例:「家を出る」)などのようなヲ格の用法が幾つかあるが、堀川 (2012:57) はヲ格由来の主題が《処置課題》として意識されやすく、「処置課題—処置内容」という関係が認識されるためには、他動性と時間的展開性が重要であると指摘している。この点に関して次の例が挙げられる。

(9) こわれたおもちゃは修理した。

(10) 余ったおかずは冷蔵庫に入れた。

また《処置課題》は、行為要求の文も含む。これらの文は主題の取り扱い方・処置について求める文である。(以下の例文(11)~(14)は、堀川 (2012:48) から引用した。)

A. 命令要求の文:

(11) 武器は捨てろ。

(12) ネックレスは外して下さい。

B. デオンティック・モダリティを持つ文:

(13) 関係者の責任は厳しく追及すべきだ。

(14) レポートは郵送で提出してもよい。

堀川は、ヲ格の主題化によって、主題は《処置課題》として認識されるだけでなく、どのような在り方で存在するかという《説明対象》の意味も生じている。

(以下の例文(15)~(22)は、堀川(2012:57-64)から引用した。)

A. 用法として時間展開性がない場合：

(15) ソルビン酸は食べ物の腐敗防止に使う。

(16) 米は年に三回作る。

B. 動詞語彙として他動性、時間的展開性が低い場合：

(17) プミポン国王はタイ国民の多くが尊敬している。

(18) 国境地帯はゲリラ軍が統治している。

C. 作成動詞および広義作成動詞による出自の説明（現在ここに存在するモノの由来、ないしは出自の事情を説明するもの）：

(19) この絵は五歳の娘が描いた。

(20) このお金はバンコクの路上で拾った。

D. 特徴づけとして意味ある履歴（主題の履歴として語る意味がある重要な情報）：

(21) この店のラーメンは小泉首相も食べた。

(22) このオルガンは 300 年前にバッハが一度だけ弾いた。

上記のように堀川 (2012) はヲ格の主題化文には《処置課題》と《説明対象》という二つの意味が生じると述べている。次の節ではヲ格の主題化文に対応すると考えられるインドネシア語の di+動詞と φ+動詞の構文について見てみたい。

3. インドネシア語の di+動詞と φ+動詞 の構文と用法

インドネシア語では、di+動詞と φ+動詞の構文は受身用法を中心とするので、一般的には受動文として知られている。このような構文は、me+動詞を使用する能動文と対立すると考えられる。

そのような動詞接辞を用いる言語の例として（タガログ語も含む）フィリピン語を挙げることができる。フィリピン語は文の中に一つの「フォーカス」要素を持っており、森口 (1995) は、「フォーカス」は「主題」に関する問題として、名詞句の「主題」選択により、動詞に付加される接辞が決定されるという現象であると指摘している。次は Schachter (1976:494-495) からの例文である。

(23) Mag-salis ang babae ng bigas sa sako para sa bata.

AT-will-take-out T-woman G-rice D-sack B-child

“The woman will take some rice out of a/the sack for a/the child.”

(24) Aalisin ng babae ang bigas sa sako para sa bata.

GT-will-take-out A – woman T – rice D – sack B – child

“A/The woman will take the rice out of a/the sack for a/the child.”

(AT=actor topic, GT=goal-topic, T=topic, A=actor, G=goal, D=direction, B=beneficiary)

上記の例 (23) と (24) は、同じことについて述べる文であるが、その違いは、「主題」の選択にある。主題は *ang* で標示されている。下線部は、文のそれぞれの「主題」(*ang*)、と「主題」格の役割を示す動詞の接辞 (*mag-*, *-in*)である (Schachter, 1976:495 参照)。例 (23) における *mag-* は動詞の actor-topic という接辞で、例 (24) の *-in* は動詞の goal-topic という接辞である。

インドネシア語は、フィリピン語のような主題の標示を持っていないが、動詞に接辞が付くことによってその形が変化するという点でお互いに似通っている。接頭辞 *di-* + 動詞と ϕ + 動詞 はその一例である。

3.1. インドネシア語 の *di*+動詞と ϕ +動詞の 構文

インドネシア語の *di*+動詞と ϕ +動詞の構文を下記の表のようにまとめることができる。

表. 1

	動作対象	否定詞	助動詞	動作主	動詞	動作主
A	<u><i>Surat itu</i></u> letter that	<i>tidak</i> NEG	<i>boleh</i> may	<i>saya/anda</i> 1sg/2sg	ϕ - <i> kirim</i> ϕ send	
B	<u><i>Buku itu</i></u> book that	<i>tidak</i> NEG	<i>harus</i> must		<i>di-baca</i> DI read	(<i>oleh</i>) <i>Ali</i> (by) 3sg
C	<u><i>Rumah itu</i></u> house that	<i>tidak</i> NEG	<i>sedang</i> being		<i>di-perbaiki</i> DI remove	

A 列の文は、動作主が第一人称と第二人称であり、B 列は第三人称、C 列は動作主が無人称の文である。表が示すように、インドネシア語は動作主が第一人称と第二人称の場合は動詞のみ (ϕ -接頭辞)、動作主が第三人称と無人称の場合は動詞に *di-* という接頭辞が付けられる。

本稿でいうインドネシア語の動詞は、「基本動詞」(語幹)のみ、ないしは「基本動詞 + 頻度・継続などを表す接尾辞 (-*kan*, *-i*, など)」である。また、インドネシア語では、人称・時制などによる動詞の活用形は存在しない。

表で網掛けされた部分は、順序を置き換えることができないが、動作対象は文頭にも、文末にも置くことが可能である。

動作主が第三人称の場合は、*oleh* ‘by’ が付くことによって、動詞に拘束されず、文頭

に置くことが可能である（例 (25)）。また第三人称の動作主が代名詞の場合は、*-nya* になり、動詞または *oleh* の後に付く enclitic になる（例 (26)）。

(25) *Oleh Ali buku itu di-baca.*
by Ali book that DI- read
「その本はアリさんが読んだ。」

(26) *Buku itu di-baca-nya.* または *Oleh-nya buku itu di-baca.*
book that DI- read -3sg by -3sg book that DI- read
「その本は彼／彼女が読んだ。」

談話において文脈によって参照することができる場合は、動作対象を省くことも可能である。これにより、動作対象が定名詞でない場合は良い文と見なされない。しかし、下記のような例の場合は動作対象が不定名詞でも可能であると考えられる。この場合、不定名詞は文頭に置かれ、文全体が談話の新情報になる。

(27) 《公式の事柄》
Peraturan harus di-patuhi.
rule must DI- obey
「ルールは従うべきである。」

(28) 《一般情報》
Kopi di-tanam di daerah dengan perbedaan temperatur besar.
cofee DI- plant in area with difference temperature big
「コーヒーは気温差が大きな地域に栽培される。」

また、Kähler (1965) は、動作対象が不定名詞の場合それが動詞の後に置かれることになると指摘している。例 (29) のような文はある人物の行動を描写するために用いられると考えられる。

(29) *Di-beli-nya buku di toko itu.*
DI- buy -3sg book in shop that 'Er kaufte in jenem Geschäft ein Buch.' (Kähler, 1965:100)
「彼／彼女はあの店で本を買いました。」

3.2. インドネシア語の di+動詞と φ+動詞構文の用法

本節ではインドネシア語の di+動詞と φ+動詞の構文の用法を見ていきたいと思う。上述のようにこの構文では、受身がその用法の中心となっている。

Chung (1976) によれば、インドネシア語は SVO 言語で、他動文の動詞に me- 接頭辞が付けられる（例 (30)）。

(30) *Ali mem-baca buku itu.*³
A. Trans-read book the
'Ali read the book.' (Chung, 1976:59)

Chung は、例 (30)の能動文には、《Canonical Passive 》と《Object Preposing 》という二つの受動文の構造があると指摘している。

(31) *Buku itu di-baca (oleh) Ali.* 《Canonical Passive 》
 book the Pass-read by A.
 ‘The book was read by Ali.’ (Chung, 1976:59)

(32) *Buku itu saya baca.*⁴ 《Object Preposing 》
 book the I read
 ‘I read the book.’ Or ‘The book, I read.’ (Chung, 1976:60)

例文 (31)の構文 は上記の表 1 の B と C 列、例文 (32) は A 列と同様である。

森山・柏村 (2003) は、di+動詞と ϕ +動詞構造を《受動形 (目的語優先) の文》と規定し、受身の意味を持つ受動文として次の例をあげている。

(33) *Pencuri itu di-tangkap oleh polisi.* (森山・柏村, 2003:64)
 thief that DI- arrest by police
 ‘That thief was arrested by the police.’

修飾関係を形成する先行詞が目的語の場合、つまり動作対象を修飾する場合は di+動詞あるいは ϕ +動詞が使用される。

(34) *Surat yang di-tulis-nya itu terlalu panjang.* (森山・柏村, 2003:95)
 letter LINK DI- write-3sg that too long
 「彼／彼女が書いた手紙は長すぎる。」

(35) *Riset yang di-adakan-nya belum selesai.* (Nothofer/Pampus, 2001:139)
 research LINK DI- carry out- 3sg not yet finish
 ‘Die Untersuchung, die von ihm durchgeführt wird, ist noch nicht beendet.’
 「彼が行っている研究はまだ終わっていない。」

この動詞形は、副詞としての機能を持っている。

(36) *Orang itu mati di-bunuh.* (Kähler, 1965:101)
 person that die DI- kill
 ‘Jener Mensch starb eines gewaltsamen Todes.’ 「あの人は殺害されて、死亡した。」

相手に何かを要求するとき、di+動詞と ϕ +動詞の形式がよく使われる。

(37) *Tolong buku itu di-beli!* (Nothofer/Pampus, 2001:160)
 please book that DI- buy Lit. Das Buch wird bitte gekauft.
 ‘Kaufen Sie bitte das Buch!’ 「その本は買ってください。」

例 (37) は第二人称に対しての要求であるが、 ϕ +動詞を使わず、無人称の文とし di+動詞を使用している。これは相手を直接指定しない、より丁寧な文と考えられる。比較の

ために、相手を直接指す以下の要求文 (38) もあげることができる。

(38) *Tolong buku itu Anda* ϕ -*beli!*

please book that 2sg ϕ buy

「その本は（あなたが）買ってください。」

要求文を否定する場合は、(39) のような文が挙げられる。(Nothofer/Pampus, 2001:162)

(39) *Buku itu jangan di-ambil!* または *Jangan di-ambil buku itu!*

book that NEG DI- take NEG DI- take book that

‘Nehmt bitte nicht das Buch!’ lit. Daß das Buch nicht genommen wird!

「その本は取らないでください。」

下の例 (40) と (41) は、動詞句が動作対象に先行する場合である。

(40) 《掲示などで「禁止する」などの動作を強調する場合》

A. *Di-larang masuk* (森山・柏村, 2001:112)

DI- prohibit enter 「入ることは禁じる・立入禁止」

B. ϕ -*Beli buku itu!* (例 (38) よりもっと強い要求文である)

ϕ - buy book that ‘Buy that book!’

(41) 《過去に完了した連続する行為を描写するため》(Kähler, 1965:103)

Lambat-lambat di-buka-nya kotak tempat sigaret, lalu di-ambil-nya sebuah,

slowly DI- open -3sg box place cigarette then DI- take -3g one

di-cocokkan-nya ke mulut-nya, kemudian di-pasang-nya dengan korek api.

DI- put -3sg to mouth -3sg.poss then DI- put on -3sg with match

「タバコの箱をゆっくりあけ、一本取り出し、口にくわえ、マッチで火をつけた。」

4. 日本語のヲ格項主題化とインドネシア語の di+動詞と ϕ +動詞の構文

日本語の「ヲ」格項の主題化文の出現度は、受動文ほど多くはないが、本節では、村上春樹氏の「ノルウェイの森」から幾つかヲ格項の主題化文と、インドネシア語版の対応する文を挙げてみたい。

● 《処置課題—処置内容》という意味関係を持っているヲ格項の主題化文：

(42) また頭開くんじゃないでしょうね? (p. 79)

Tapi, kepala-nya tidak akan di-bedah lagi, kan? (p. 352)

but head 3sg.poss. NEG will DI- operate again tagQ

(43) 放しちゃだめよ。なかなかあんな子いないんだから。(p. 86)

Jangan ϕ -*lepaskan* *ia*, *karena* *jarang* *sekali* *ada* *anak* *seperti-nya*. (p. 358)
NEG ϕ -let 3sg because rare very be child (girl) like -3sg

(44) 食卓はすっかりほこりを落としてからニス塗りをした。(p. 196)

Meja makan *ku-* ϕ *vernish* *lagi* *setelah* *ku-* ϕ *bersihkan* *debu-nya*. (p. 460)
dining table 1sg- ϕ varnish again after 1sg- ϕ clean dust -ART

(45) 放っておいても物事は流れるべき方向に流れるし、...(p. 246)

Di- *biarkan* *pun* *segala sesuatu-nya* *akan* *mengalir* *ke arah* *yang* *semestinya* ... (p. 505)
DI- let even all things -ART will flow to direction LINK should be

(46) カーテンはときどき洗うものだというのを誰も知らなかったのだ。(p. 31)

... *tak seorang* *pun* *tahu* *bahwa* *gorden itu* *sesekali* *harus* ***di-****cuci*. (p. 24)
NEG a person even know LINK curtain ART once must **DI-**wash

● 《説明対象—説明内容》という意味関係を持っているヲ格項の主題化文：

(47) このレコードあなたが直子にプレゼントしたんでしょ？(p. 283)

Piringan hitam-nya *kamu* ϕ -*hadiahkan* *kepada* *Naoko*, *kan?* (p. 541)
record -ART 2sg ϕ -present to Naoko tagQ

(48) この二曲は直子が死んだあとでマスターしたのよ。(p. 284)

Dua lagu ini *aku* ϕ -*kuasai* *setelah* *Naoko* *tidak* *ada*. (p. 542)
two song this 1sg ϕ -master after Naoko NEG be

(49) このことは今まで殆ど誰にも話したことはない...(p. 294)

Hal ini *belum* *pernah* ***di-****ceritakan-nya* *kepada* *siapapun*, ... (p. 274)
matter this not yet ever **DI-** tell -3sg to anyone

日本語のヲ格項の主題化に関する上記の例文(42)～(49)が、インドネシア語の di+動詞および ϕ +動詞の構文と対応することを示した。主題(ヲ格項)とインドネシア語の動作対象は下線で、接頭辞 di-とゼロ接頭辞は太文字で示した。

《説明対象》という意味を持つヲ格項の主題化に関する例文(47)～(49)は、現在ここに存在するもの、ここに存在する由来ないし出自の事情を説明する文と見なすことができ、インドネシア語の di+動詞と ϕ +動詞の構文と対応している。

《処置課題》という意味を持つヲ格項の主題化に関する例文(42)～(46)もインドネシア語の di+動詞と ϕ +動詞の構文と対応している。例文(42)の「頭」は不定名詞であるが、インドネシア語の場合は、動作対象は特定の名詞句であり、文脈から見て、「頭」は、手術を受けた主人公の父の頭である。従って、「*kepala*」(「頭」)には第三人称の所有主代名詞「*-nya*」が付いている。

以上、日本語のヲ格項の主題化文はインドネシア語の di+動詞と ϕ +動詞構文と対応関係があることを述べてきた。インドネシア語では、助詞ハのような対比の機能を持つ文法的手段が存在しないので、日本語の名詞句が不定名詞の場合、インドネシア語にそのまま訳すと不自然な文になり、それを特定化するための手段を講じなければならないことが分かる。

日本語において主題になる名詞句は、インドネシア語に対応する形が文脈／コンテクストに応じて様々であり、今後の課題としてこの問題を更に深く探究したいと思っている。

省略記号

ART	冠詞	ϕ	ゼロ マーカー
DI	接頭辞 di- (インドネシア語)	1/2/3sg	1 st / 2 nd / 3 rd person singular
LINK	リンカー	1/2/3pl	1 st / 2 nd / 3 rd person plural
meN	接頭辞 me- (インドネシア語)	1/2/3sg.poss.	1 st / 2 nd / 3 rd person singular
NEG	否定詞		possessive pronoun
tagQ	付加疑問詞		

※ 太文字、下線、などは、筆者が付けたものである。

注

¹ A:「ケーキは誰が作った？」 B:「ケーキは母が作った。」という「母が」の部分が焦点化されたタイプで、ヲ格項の主題化文タイプではなく、《解答提示》に属するとしている。

² 文脈によって、文頭がない場合もある。会話などで助詞ハは省くことができる。

³ Chung, Kähler による例文は古い綴りを使っている。本稿では筆者による新しい綴りに書き換えられている。

⁴ Chung (1976)は《object preposing》は表層形式が object topicalization のようであり意味的にも能動であるが、Subject-to-Object Raising, Equi, など幾つかの統語的規則との相互作用を調べることによって構文的に《canonical passive》のように振る舞う証拠を挙げている。

Subject-to-Object Raising の例は次のようになる。以下のインドネシア語の文の目的語は埋め込み節であり、埋め込み節は《object preposing》(O)と《canonical passive》(C)である。

O: *Mereka anggap buku ini sudah saya baca.* C: *Mereka anggap buku ini sudah di-baca Ali.*
 they believe book this perf I read they believe book this perf pass-read A.
 “They believe this book, I have read.” “They believe this book has been read by Ali.”

以下は、埋め込み節の ‘saya’ 「私」と ‘Ali’ が、主節に移動し受動化される object raising の文である。

O: **Saya di-anggap mereka buku ini sudah baca.* C: **Ali di-anggap mereka buku ini sudah di-baca.*
 I pass-believe by them book this perf read A pass-believe by them book this perf pass-read
 (I was believed by them this book to have read.) (Ali was believed by them this book to have read)

さらに以下は、埋め込み節の ‘buku ini’ が主節に移動し受動化される object raising の文である。

O: *Buku ini di-anggap mereka sudah saya baca.* C: *Buku ini di-anggap mereka sudah di-baca Ali.*

Book this pass-believe by them perf I read Book this pass-believe them perf pass-read A.

“This book is believed by them to have been read by me.” “This book is believed by them to have been read by Ali.”

主節の object raising は主節が埋め込み節の主部の場合に限られるという規則がある。以上の文が示すように ‘saya’ と ‘Ali’ が object raising された場合は非文になる。つまり ‘Saya’ は

《object preposing》の主部ではなく、《canonical passive》の'Ali'と同様である。このことによって、《object preposing》は《canonical passive》のように振る舞い、受動文として見なされ得ることが分かる。紙幅の都合によりここでは他の例は省略する。

参考文献

- 尾上圭介 (1995) 『『は』の意味分化の論理—題目提示と対比』『言語』24 卷 11 号
- 菊池康人 (2010) 「日本語の 2 種類の『文構成原理』と、『が』の文構成上の機能」上野善道 (監修) 『日本語研究の 12 章』明治書院
- 白川博之 (監修) (2001) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 堀川智也 (2012) 『日本語の「主題」』ひつじ書房
- 三上章 (1960) 『象は鼻が長い』くろしお出版
- 森口恒一 (1995) 「フィリピン・台湾高砂諸語における『主語』と『主題』」『言語研究』107 号 87-112
- 森山幹弘・柏村彰夫 (2003) 『教科書インドネシア語』めこん
- Chung, Sandra (1976) “On the Subject of Two Passives in Indonesian”. In Charles N. Li (ed.) *Subject and Topic*. Academic Press, Inc.
- Departemen Pendidikan Nasional (2002) *Kamus Besar Bahasa Indonesia*. 3rd edition. Balai Pustaka.
- Kähler, Hans (1965) *Grammatik Der Bahasa Indonésia*. Otto Harrassowitz Wiesbaden.
- Nothofer, Bernd and Karl-Heinz Pampus (2001) *Bahasa Indonesia*. Julius Gross Verlag Tübingen.
- Schachter, Paul (1976) “The Subject in Philippine Languages: Topic, Actor, Actor-Topic, or Non of the Above?” In Charles N. Li (ed.) *Subject and Topic*. Academic Press, Inc. 493-518

引用作品

- 村上春樹 (2004) 『ノルウェイの森 (上) (下)』講談社
- Murakami, Haruki (2005) *Norwegian Wood*. Kepustakaan Populer Gramedia.